

第6号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十二年五月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

明達光輝

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍した。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わされた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・柳歌・短歌・俳句・川柳）・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長
編集長

大西 生一



目次

さつま芋……額田沙織	1
春句……額田沙織	4
秋桜……夏子	6
人間と掛けまして、ホタテと解く……太田隆一	8
あーあ『光るの君』、よーし『源氏の君』……高阪博一	11
ビッグマザー……明花	16
干す……永井組若芽	18
星に願いを……高阪博一	21
自句自解……彩華	28
俳句……高阪博一	29
詩二編……大西裕子	30
僕と海……柴小路秀磨	34
『ライ麦畑』で『卒業』して……高阪博一	39
春つげる……水田竜子	44
精神病院闘病記(2)……豊川宣行	45
詩二編……大西隆史	50
競演「ハル」……今月・高阪博一・大西隆史・はなのなこ	54

さつま芋

額田 沙織

一月も半ばに入り、やつと普段の生活に戻った。昨年暮れに買い置きをしていた孫のお八つがなくなってしまうたが、身を刺す様な寒さと、財布の軽さも相俟つて、買い物に行く気になれず、家にある物で間に合わせようと考えたが思いつかない。仕方なく外出の用意を始めた時、昨年秋姫路の知人から送っていたいただいたサツマ芋が残っていた事に気付いた。

急いで裏の倉庫へ。段ボール箱を取り出し蓋を開けると、中からプーンと湿気た土の臭が鼻をつく。

大きそうなのを二、三個取り出し、皮を剥いて適当に乱切。ラップを掛けてレンジで「チン」する。柔らかくなった芋を裏漉しにして、牛乳とバター、砂糖にバナラエ

ツセンスを少量入れて、スイート・ポテトに。

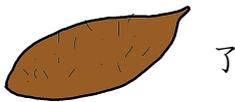
昔は芋を柔らかくするのに、蒸器を使っていた。蒸し加減をみるのに時々蓋を開け、ホワーと立ちのぼり広がる湯気の中、水分をたつぷり含んだ濃い生成色の芋に箸を通し、火が通っているかどうかを調べた。箸を刺した時、独特の甘い臭いが漂い、何となくその場を離れ難く、蒸し上げるまで鍋の側にいた。

懐かしく思い出される、戦後の食糧難時代疎開地で、母を手伝い作った蒸切芋。

皮を剥き蒸した芋を七、八ミリの厚さに縦切りにし、ムシロの上に並べ干していく。芋を切る時、糸の片方を銜えもう一方を手で、ぐるりと廻し引っぱって切っていくが、幼い私は旨くできず厚さはまちまち、おまけに途中でち切れたりする。でも楽しい作業だった。切干し芋も、今ではほとんど食べる機会がない。理由の一つとして、生活環境の変化による暖房器具に原因があるのかも知れない。火鉢の上に網をのせ、サツと焙ると柔らかで少し歯応えがあり、焼芋の様な甘味が出て美味しい。当時は保存食として、力強い味方だったと思う。

さいこのサツマ芋、昔から我国にあつた農産物だと思つていたが、伝来したのは一六〇五年、中国から鉢植えにして、野^{ヌグン}国総管という人が、常時食糧不足に悩まされていた琉球本島に持ち帰つたのが最初で、やがて十八世紀（吉宗の頃）江戸市場に登場、庶民の味となり、蒸^{フカ}し芋を売る店が現れた。その後間もなく、今でも人気の高い焼芋が爆発的に広まり明治に入るまで、焼芋屋は数多くあつたらしい。

食料事情が好転した現在、主食として食べられることは殆どなく、健康に着眼した間食、副食、菓子としてサツマ芋の特色を生かした加工食品が数多く紹介され、そのイメージは向上しつつある。



春句

図書館へ 続く坂道 椿咲く

みつけたよ 笑顔が囲む つくしんぼ

若菜摘む 野にふる光 たゆとうと

東風吹きて 波打際に 玉藻寄る

額田 沙織

かくとだに
風をいたみて
春を告ぐ



〔詩〕

秋桜……ただいま恋愛中

夏子

吾亦紅 初めて君と出会った日の

木犀に酔う きっかけを捜してる

愛してもいいですか 芒揺れたから

胸の中で何かが爆発 彼岸花

秋桜 初恋つてこんな色かしら



つづく

※4号 夏の海……恋のはじまりの続き

人間と掛けまして、ホタテと解く

太田隆一

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」

とは誰が言った言葉か知りませんが、
実を的をいた言葉であると思います。

しかしながら、歴史は繰り返すと言う
言葉からも推察されるように、人間と
は永遠の愚者なのでしょう。

少し自分のことをお話ししましょう。
私は現在大学で分子生物学というのを

専攻しています。分子生物学とは何か、
という問に一言でお答えするなら「生
き物がどうして生きているのかをミクロ
レベルで明らかにする学問」とするのが
最適かと思っています。学問とは言っても、
最近流行りの PS 細胞だとか人工知
能だとか、そういった「すぐに役に立つも
の」とはワケが違います。どうして細胞
が分裂をするのか、なんてことを知らな
くても細胞は分裂を続けるし、私たち
は生きていけるからです。

日本は基礎研究で立ち遅れが目立つ国だといわれてきました。それは、外国の進んだ文化に追いつくためにまず眼に見えるところから変えていこうとした為ではないかと思えます。事実、旧帝大の多くは医学部・工学部・法学部から発達していきました。医療、工学、法学は国の基幹となるものですから、そこが発達したのは頷ける話です。日本は技術立国を果たし、世界第二位の経済大国と呼ばれるまでになりましたが、現在ではその立場も失ってしまっています。最近ありました事業仕分けでスパコン

の話が世間を騒がせました。蓮舫議員の「世界一を目指す理由は何か。2位ではだめなのか」という発言が批判されていましたが、あながち国民の声としては間違っていないのではないかと思えます。ここでも重要なのは「スパコンが世界一位になろうが、自分たちの生活は変わったりしないだろう」という考えのことです。『技術は人の役に立つべきである』という考えが闊歩する世の中で、『いつ役に立つ何もわからない、役に立たない可能性もある』学問の肩身は非常に狭いものになってしまいました。「役に立つか

からお金を使う、役に立たななさそうだからやめる」という理論は単純明快です。しかし、足元だけを見ていては正しい道のりも定まりません。時に遠くを見ることも必要だと私は考えるのですが、現在の風潮とはあわないようです。

私が行っている基礎研究も、文芸活動も人の心を満たすと言う点では似たようなものかもしれません。このような活動に力が注がれなくなつたときに人類は衰退を始めるのではないかと思えます。大げさな話ですが、基礎研究は私たちの暮らしの土台となり、芸術活

動は私たちの心の豊かさの土台になっていきます。それが軽視されはじめた世の中に警鐘を鳴らさなくてはいけません。私たちがすべきことは、やはり『より良い作品を書く』ことでしょうか。厳しい世の中ですが、眼に見えないものを愛でる心は失いたくないものです。

その心は、
どちらも干されると一味ちがいます。お後がよろしいようで。

あーあ『光るの君』、よーし『源氏の君』

高阪博一

後ろのほうで声がした。密かな、密かな声が。振り返った。そこにあるのは本棚だけだ。

西日が入ってきた。ガラスの扉を通して、琥珀色の光が射す先を眺めた。色褪せた文庫本、その表題を射していた。それは源氏物語、すると、あの声は。じつと、見つめて、耳を凝らす。「なごか、読まざらむ。疾く、読むべし、疾く」と聞こえた。

サンデー：毎日で、終に、頭にきたか？とご心配の同人諸氏、ご心配は無用です。高阪は元氣です。いたって健康、気力充実、制作意欲旺盛です。

いま、本棚にある源氏物語は岩波文庫のワイド版で、全6冊揃っている。奥付を見ると一九九四年（平成六年）十月十七日、第一刷発行と記してある。それ以降に買っているのだろうが、正確には思い出せない。凡そ十四・五年は経過しているのだろう。

何故、これを買ったのかも、はつきりと覚えていない。多分、源氏物語は読むべき本だという歪な義務感のようなものを持つていたからかもしれない。おまけに、原文で、と思ったのだから

始末が悪い。

当時、息子に言われたことが、不思議と頭に残っている。「なんで、全巻六冊、いつぺんに買ってくるの。先ず、一冊読み終わって、二冊目買ってくれば良いのに。どうせ、無駄になるのに」とシニカルで静かな微笑みと共に蘇ってくる。息子が下宿に帰った後、ふと、机を見ると『重要古語五百選』等数冊の本が置いてあったことも。

本棚を開けて（もう、あの声はしませんので、念のため）文庫本の一冊目を開いてみた。第一帖の『桐壺』は何かと細かい書き込みがしてある。線を引いたり、書き込みを入れるのは私の癖だ。語句を細かく調べながら読んでいたことを思い出す。次の『帚木』には全く書き込みはない。結局、第一帖で終ってしまい、その後、まったく積読ツンドクに変わり、色褪せた表紙になつてしまったのである。あーあ『光るの君』である。

今年の初めから、小西甚一という人の諸作を数冊読んだ。日本の中世文学の碩学で、文芸批評の専門家でもある。主として連歌・俳諧に関する著作を読んでいて、古典文学（厳密な意味で使っていません。十世紀以降の古い文学作品程度で使っています）の源流は源氏物語や古今・新古今和歌集にあるということを改めて実感した。すると、無性に源氏を読みた

くなくなった。ただ、ひたすら源氏を読みたくなくなった。

そこで、前回の失敗を糧として、読了するための戦術を考えてみた。しかし、大前提は原文で読む。これを崩すつもりは、つゆほどもない。身の程知らずだが、広げる風呂敷は大きいほうが良い。布巾やハンカチでは、またポケットに仕舞いかねない。

先ず、思い浮かんだのは『木を見て森を見なかつた』ことである。古語の知識・古文の文法・和歌の解釈にこだわったことである。余りにも辞書や古文読解の参考書に頼り、その引き疲れで、嫌になつてしまつたのである。つまりは読書ではなく、受験勉強をしていたようなものだ。今さら受験勉強をするつもりはない。そこで、辞書等は最低限にして、余程、分からない語句だけに絞り、文章の大意を掴むことを優先する。古文といつても日本語である。英語やドイツ語はサツパリであるが、日本語ならおぼろげでも分かると思うからである。

次に、各帖の筋を予め頭に入れて読むことである。譬えは悪いが、未知のジャンルに踏み込むようなものだから、案内人は不可欠だ。その案内人に格好なものを持つていることに気付いたのである。美術本で、題名はそのものずばり源氏物語。各帖ごとの大和絵とその帖の解説が書いてある。何故、買ったのか、これも明確には覚えていない。奥付が一九九七年四月

二一日、第一刷発行と書いてあるので、例の文庫本購入後に買ったのは紛れもない事実である。多分、いま考えていることと同じことを考えていたのかも知れない。平たく言えば、『アンチヨコ』であるが、老いの楽しみなら許してもらえよう。

最後は古文に馴れることである。一日数時間読書しているので、文章を読むことは問題ないのだが（諸氏、ご存知のように、朗読はサツパリなのだが）何せ、古文である。高校時分から漢文に古文は『潜水艦、未だ浮上せず』でなみの下を深く潜行していた。卒業後も、古文などは殆ど読んだことがない。予行演習は是非とも必要なのだ。そこで、本屋に行き、文庫本の本棚の前でいろいろと物色し、更級日記を購入した。物語ではないものの、ほぼ同時代の女性によるものであることがその理由であるが、それにもまして、『薄くて安い』が決め手でもあった。本文で七六頁、丁度良いウォーム・アップであり、古文馴れである。既に半分程度は読んでいたので、十二月中には読了の予定である。予行演習でギブ・アップするのは、何といつても意気がなすすぎる。

これで戦術は整った。と、思っている。急ぐつもりはないので、来年一年をかけて読み終えれば良いと考えている。源氏物語は54帖だから概ね一カ月五帖弱、一週間一帖ペースで読め

ば良いことになる。計算は実に簡単に出来る。だが、実行は？。する前から弱音は吐かない。よーし『源氏の君』である。

読書するのにこんな計画を立てたことは過去にない。ただ、読みたいの一念のみだ。老いの楽しみのみだ。『雅という世界』がどのようなものか覗いてみたいだけのことだ。

以前は読書することに何か実利的な目的があつた。単位取得のため、仕事の必要上のため、人様との付き合いのため等々、そんなものは、今まったくない。それに自由に使える時間はたつぷりある。その時間を自分のためだけの楽しい時間に変えるだけのことだ。

これを書いている時に、邪念が一つ起こってきた。奮闘記が書けるのではないかと。来年は年四回の投稿予定だから、またしても『光るの君』か、やつたぞ『源氏の君』かは別にして、最低一回は書けるのではないか、いや決まりと思つた。

「やれやれ、十二月締切りの原稿が書けた」と呟いて、パソコンの前を離れた。階段を下りて、台所の換気扇を回し煙草を吸つてお茶を飲み、再びその前に坐ると、スクリーン・セイバーに文字が流れていた。「そが心ばせ、いみじゅうめでたけれど、ややあはれなりけり」であつた。「あ、また出た。紫」と叫んで、坐つた椅子から滑り落ちた。

了

ビッグマザー

春

やわらかな日差しは
わかめを乾かし

夏

焼けつく太陽光線が
梅干しを紅くする

秋

深まる秋の朝日で
渋柿は甘みを増し

あ
す
か
明
花

冬

お陽さまはゆつくり昇り

木枯らしと一緒に大根の水分を抜く

しゅんかしゅうとう
春夏秋冬

ふとんを干し

毎日

洗濯物を干す

ときに湿ったところも

青空に干す

お陽さまは

ビッグマザー



干す

永井組若芽

秋が深まるころ、隣りのマンションの物干し棹に、皮をむいたばかりの渋柿が吊るされると、何だか遅れをとったような気になり始める。

「今年はまだ干さないの？」と私をそそのかすように干し柿がオレンジ色の笑顔でぴかぴかと輝く。

二十年以上も前のことだが、手作りの干し柿をご馳走になって以来、私は干し柿の大ファンになった。奈良から神戸に通勤していた垣内さんという男性社員の柿だったので、「奈良の垣内さんの柿」が憧れになった。きれいなオレンジ色でぽったりした実で、ほのかな甘みが自然で『慈味』という言葉が似合った味だった。

渋柿を剥いて干すだけのことだが、美味しくつくる秘訣は、毎日柿を揉むのだそう

だ。そんなことまで記憶していたのだが、肝心の渋柿を手に入れることができなかつた。

ところが数年前、よく行くスーパーで、「あたご柿」という大きな渋柿を発見したのだ。一個百円。「高いなあ」とは思いつつも、憧れの干し柿を作りたくて、十個購入した。

渋で包丁も指先もベタベタ。ちゃんと吊るせるように、枝がヘタのところまでT字に残っている。そこを拠った紐に引つ掛ければ良いのだが、上手に吊るせない。私の美意識では、均等な間隔で干したいのだが。

それでも窓から干したら、だんだんうれしくなって、毎日2階までとんとん、と足も弾み、「美味しくなあれ」と柿に言い聞かせて揉むこと約十日。やがて茶色に変色し、もう甘くなっているのかと思案していたら「甘くなるとひよどりがつづきますから、気をつけて」とアドバイスをくれた方があった。

ひよどりに横取りされては堪らないので、思い切って食べたら十分に甘くなっていた。

二十年も覚えていたほどの味なのか、大いに疑問だったが、あの時食べた感動と同じくらいお陽さまの力に感謝した。

以来、秋が深まる頃、渋柿に出会うことを心待ちにしている。



星に願いを

高阪博一

初冬の日暮れは早い。川沿いの道を歩きながら、ふと立ち止まって、暗くなった空を見上げた。『流れ星が消えるまでに願いを込めると叶う』というのが浮かんできた。こんなところで見えるはずもないがと思っていると、東から西に赤い光が、ゆつくりと動いているのが見えた。「流れ星にしよう。お願いします」と光の方向を見て呟いた。昨日の二日酔いは消えて、頭はすっきりしているが足は重い。「えつと、昨日はどうやったんかなあ。何したんかなあ」と反芻するように口の中で唱えながら、下宿に向つてボチボチと歩き出した。

「たのむ、一人、急にだめになった。来て」と友人から携帯にメールが入った。メールには街なかにある店の名前も用意よく入っていた。冬休みの帰省前に、友人が三対三で

他大学との合同コンパを企画していたが、レポートやアルバイトで忙しく、行くのを断っていた。「急に言われても」と思いつつ、男女同数じゃないと何かと不便だろうと考え、バイト先に無理を言つて、それに出かけることにしたのだった。

その店はバイト先から歩いて二十分程度のところであり、友人たちとよく行く居酒屋風のところだ。夜の八時頃から始まったが、ビールにチュウハイ、果てはハイボールと、酒が入るごとに盛り上がっていく。相手の女性三人の中に、日本酒だけを飲む人が一人いた、それも冷や酒で。「今時、日本酒飲む、若い女性がいるんや」と妙に気になって、斜め向かいの彼女を眺め、学校の話やアルバイトの話などをワイワイ喋っていると、あつという間に時間が過ぎていった。

もうこれで終わりとなったのが十一時頃だったろうか。店を出て、下宿に歩いて帰ろうとすると、重そうなショルダーバックを、黒いダブルコートの上から、襷がけにした一人の女性がついて歩いてきた。フワフワした足取りで、お互い、やつと真直ぐに歩けるという感じだった。

「下宿の方向が一緒やから送るって言ったよ」と言われたが、その約束ははつきりと覚えていない。しかし、冷や酒を飲んでいたこと、栗色の長い髪はよく覚えていた。川沿いの道を二十数分歩いたのだろうか、自分の下宿の前に来た。「このマンションの三階に、僕、住んでるよ」と言つて、彼女の下宿に送ろうとすると、「気分悪い」と青くなつた顔を向けてきた。「休んでいく」と言うと、あつさり「ふん」と答えたので、薄暗い電灯の照らす階段を上がつて部屋に入った。

「寒いなあ」と言いながら炬燵のスイッチをいれ、「トイレ分かるよね」と彼女のほうに顔を向けると、また「ふん」と短い返事が返つてきた。青みがかつた顔色が多少心配ではあつたが、部屋に帰つてきた安心感からか、それとも、余り強くないお酒を雰囲気にかかせて飲んだせいかわ、炬燵に足を入れると、ウトウトしてしまつていた。「大丈夫？」と眠たそうな声で聞くと、トイレのドア越しに「ふん」という声がおぼろに聞こえてきた。

「寝てしもた、送らな」と気が付いた。眠気眼をこすつて、辺りを見回すと、机にライ

トの灯つているのが、ぼんやり見えた。「机、借りてるよ。今日、午前中にレポート提出
やから」彼女の低い静かな声が聞こえた。「もう、何時なん」と聞くと「朝の六時前」
と返ってきた。「何時から起きてるの」と問うと、「二時間ほど前から。昨日、トイレか
ら出てきたら、無邪気な顔して寝てるし。起こすの申し訳ないし。暗いところを一人
で歩きたくないし。まあ、ええか、大丈夫、私も炬燵に入つて、寝てしもたわ」と屈託の
ない声があつた。「そうなんや」と充分に覚めぬ声で言うと、「もう、ちよつとしたら明
るくなるから、送つてもらわなくてもいいよ。昨日はありがとう」と落ち着いた声が続い
た。「分かった。了解」と答えて、彼女の点けたストーブのぼんやりした火を眺めなが
ら、また眠つてしまった。

二時間ほどして、カーテン越しの明るい陽の光で目が覚めた。炬燵で寝てしまつた
せいか、身体が痛く、頭はボケーとしていて、気分は最悪だつた。バイト疲れもあり、そ
のまま、もう少し寝たかつたが、授業に出なければ単位が危ないので上半身を起こし
た。真つ先に机に目がいった。机には、もう、彼女の姿はなかつた。ストーブの赤い火も

消えてしまっていた。

「あの時間からレポート、よう書くよなあ」と感心しながら、下宿を出て歩き出した。学校に着き、彼女のことを聞きたくて、昨日のコンパを企画した友人を探したが、姿はなかった。授業中も「レポート、間におうたやろか。二日酔い、大丈夫やろか」と彼女のことを気になつて仕方がなかった、一寸した後悔とほのかな期待とがないまぜな気持ちと共に。

バイトへ行つても、考えることは彼女のことだった。同年代のひとがレジカウンターに来ると、彼女のことが浮かんできた。「ちゃんと授業うけたやろうか。いや、冷や酒飲んで、強そうやから、大丈夫や」と同じようなことを考えては釣銭を間違ひ、店長にこつぴどく搾られる始末だった。

星が瞬き出だした空をもう一度見上げた。月がやけに輝いているのが目に入った。あの赤い光はもう見えない。「せめて、メール・アドレスぐらい、聞いとけばなあ」と溜息交じりに呟いた。鉛で出来た靴を履いているような足どりで歩いて、ようやく、川沿い

の道を曲ると、向こうの方に、下宿の灯りが見えてきた。「今日はきつい一日やった。それにしても、俺つて、不甲斐ないのかなあ」と多少、苦い味のある思いがこみ上げてきた。そして、彼女の姿も。「あの曲がり角から、下宿まで、こんな距離があつたのかなあ」とやけに疲れた声を出しながら、いつこうに近づいてこない灯りを眺めた。

やつと、たどり着いて階段をのぼった。「なんで、三階やねん」と舌打ちをしながら、二階を過ぎて、踊り場から二・三段上ると、三階のぼんやりとした電灯の下に、人の姿が目に入った。三階に上がりきつた途端、「遅かつたね」と弾んだような声があった。「あの椅子、柔らかで坐り心地満点やったわ。それに机も、ザラザラしてなくて、丁度ええ大ききさやし、ストーブも暖かつたし。今日もレポート書いてええ」と落着いた静かな声が聞こえてきた。

自然と笑みがこみ上げてきた。「ヒ、ヒやなかつた。やつぱり、星やつたんや。流れ星やつたんや」と心の中で叫びながら、「冷や酒、ないよ」と落着いた振りをして答えた。「分かつてるよ」という含羞んだような微笑まじりの声が聞こえた時には、ドアのノ

ブを握つて自分のほうへ思いつきり引つ張つていた、後ろから「カギー」という華やいだ
声も聞かないで。

了



自句自解

彩さい

華はな

勢揃いのラツパ水仙鳴りそうな

三年前に小さな黄水仙の鉢植えを買いました。玄関がばあつと明るくなり、小さな小さな春を買ったような気分嬉しかったことを覚えています。

やがて花が枯れても水だけはやり続けていました。夏が終わり、秋も終わり、冬になった頃、植木鉢に水仙の葉っぱがニセンチくらい出ているのに気がつきました。

二月になると葉っぱは急に伸び、いつの間にか堅い蕾がついていました。そして三月の初めには黄色い花が一斉に咲きました。少しずつ咲いてくれたら、もつと長い間花を愉しむことができるのにと恨めしくも思いました。

昨年の春も同じように小さな黄色の花が咲きました。一斉に咲いた水仙を眺めていると、まるで小さなラツパのようです。そして、その小さなラツパは今にも鳴りだしそうでした。

自句自解文を書いている今年も、黄色い花は律儀に咲き、和ませてくれます。

俳句

高阪博一

大つごもり。夜道歩きし折、暗き空より、鐘の音聞こえぬ。明くる元旦、作りし三句。

欲おとす暗夜をめぐる除夜の鐘

鐘すぎて冴えゆきわたる夜の月

月消えて暁うれし初詣

了

飛行機雲

大西 裕子

雲は空にあるんだよ

空に一筋の飛行機雲

幼い頃あの雲を追いかけた

だから？

追いつくはずなどないのに

追いつけると思っていた幼い自分

追いかけたって無駄だよ

あの雲を追いかけよう

無駄じゃないよ

無理だよ

何もしていないのにどうして分かるの

無理じゃない

どうして人は大人になるんだろう
ずっとずっと子どものままでいたいの

”何もしていないのにどうして分かるの”
そんなことを言った子どもはもういない
残ったのは”無理だろ 無駄だよ”と呟
く大人

遠い空に消えた飛行機雲を見やる
あの先に用事があるのだと言い聞かせ
消えかけた飛行機雲を追った



紅いあかい空の下

大西 裕子

暗いくらい部屋の中
隙間から一直線に差し込む夕日
その色が怖くて
知らず目を閉じた

手の中には一通の手紙
和紙に墨で書かれた古風な手紙
達筆な文字は几帳面なあの人
の性格
少し墨が薄いのは急いでいたの
だろう

最後の文字の掠れがそれを物語る

——幼馴染ガ事件ニテ重傷ヲ負イ家族

ハ死亡——

手紙の中身はたつた一言

その一言が自分を壊した

知りたくなかつた現実

知らなければ後悔した現実

知りたかつたけど知りたくなかつた

握りしめた拳に爪が喰い込む

僅かに走る痛みに眉を顰める

けれど君の感じた痛みはこれ以上なの
だろう

幾つもの小さな弓形に裂けた掌

その傷跡をじつと見つめて

自分は真つ赤に染まつた空を見た

真つ赤に染まつた空の下

頬に当たつた雨粒が

君が流した涙のようで…

知らず自分も涙を流してた

赤い赤い真つ赤な空の下

君に届けと伸ばした手

落ちてくる君の涙を受け止めて

泣いている君を抱きしめた

赤い赤い真つ赤な空の下

たつた一人の君を想う

◆薄い部分があるのは作者の次のメールによります。色とグラデーションはワードで読み込みましたが出ませんでした。編集者のワードは2003バージョンで、仕様が変更された2007バージョンで加工された一部は読み込めないのかも知れません。(編集者)

※「いただいたメール」『紅いあかい空の下』は前回の

作品から一部添削しております。この作品においても手紙部分のフォントと色使いを周りと変えております。手紙ということでフォントを変え、文字の掠れが視覚的に分かるように色にグラデーションを加えております。もしも印刷上でみ難い等の理由があれば色を統一してくださっても結構です。

「僕と海」

柴小路 秀磨

自分の足で砂の上に立っていたのか、それとも誰かに抱かれていたのか定かでないが、潮鳴りと共に押し寄せてくる白い波が怖くて泣きじゃくっていたのだけは、はつきり覚えている。が僕の中にある最も幼い記憶である。

昭和二十二年の盛夏、僕は神戸の須磨に生まれた。その地にあつて、幼い頃の遊び場は専ら家の近くの裏山や海浜であつた。小学生の頃、夏休みともなれば、海水パンツ一つで近くの天神浜てんじんはまに集い、仲間と一緒に夕方まで水遊びに興じ、淡路島のシルエットを眺めながら家路に就くという生活が続いた。

浜に集う近所の子供達の中で一番年少であつた僕は、今と同様、水にはとうてい浮きそうもない瘦身で、おまけに水への恐怖心から、ただ一人満足に泳げなかつた。そ

んな僕はいつも独りで、仲間と少し離れた浅瀬でイカナゴやクラゲを追いかけて遊んでいた。

ひと夏を海浜で過ごす僕達は、時折いまわしい肝試しに遭遇することがあった。それは祖父に連れられて行つた縁日の「お化け屋敷」よりも恐しく、勇気のいる肝試しであった。

お盆も過ぎ、人影もまばらになつた砂浜にポツンと置かれた一つの蕙むしろ、正確に言うとうと死体の上に被せられた蕙である。その頃は海で遭難した身元不明の遺体は引き取り手が来るまでその状態で砂浜に放置されていたのだ。僕達はそれを見つけると、恐る恐るその蕙に近づき、勇氣ある年長者の一人がその蕙をそつとめくり上げるのだ。氣の弱い僕も、怖いもの見たさから、仲間の後方から覗いてしまう。そしてまぶた瞼に焼きつけてしまうのだ。青黒く、ふやけたあの顔を。そこにあるのは「お化け屋敷」の幽霊ではない、現実の死だ。見てしまつたら最後、寝就けぬ夜が数日続くことになる。「ああ、見なければよかつた。」と、後悔するのが落ちであつた。

ある年の夏、この死への恐怖が現実のものとなつて僕に襲いかかつてきた。その日、僕はいつものように、遊泳する仲間から離れ、独り突堤近くの浅瀬で、胸まで漬かつて遊んでいた。比較的波の高い日であつたのだろう。突堤に打ち寄せる波に、僕は一瞬足をすくわれた。そしてそのまま引き潮の勢いで沖へ引きずり込まれた。もうそこでは僕の長い足も海底には届かない。地に足の着かない恐怖のあとに、息のできない水中地獄が待つていた。死への舞台にかけられた重い緞帳どんちようの中に全身をすっぽりくるまれた僕は、何とかそこから抜け出そうと必死にもがいた。時間にすれば数分にも充たない短い間であつたかも知れないが、阿鼻叫喚ならずや、独り、救いのない闇の中で悶え苦しむ僕には永遠の時間に思えた。「ああ、僕はこのまま死んでしまうのだ」。死に直面した僕の頭の中に浮かんだ一つの光景。見慣れた砂浜にあの筵をかけられて横たわる僕の軀。薄れ行く意識の中でふつと、「今死んだら、僕の遭難記事は夕刊に載るのだろうか、それとも明日の朝刊に載るのだろうか？」と、何と僕はこんな馬鹿げたことを考えたのだ。そして意識を失つた。何故か母の顔は浮かばなかつた。

まぶた
瞼の裏にまぶしい太陽を感じて、僕は意識を取りもどした。砂浜に寝かされた僕の上にあの筵はかけられていなかった。海水をたらふく飲んだ僕は、そのまま砂の上に仰向けで、ぼんやりと夏の空を眺めていた。

海中でもがく僕の腕を見つけ、仲間と一緒に救い上げてくれたのは、隣に住む中学生の「トシヒロ」兄ちゃんだった。彼がいなければ今の僕は存在しないかも知れない。「トシヒロ」兄ちゃんは、正に命の恩人であり、立派に人命救助で表彰されてもいいわけだ。ただあの日、幼い僕は恐怖のあまり、事の顛末てんまつをしつかりと親に話していなかったと思う。

それにしてもあの時、僕が悶え苦しみ、薄れる意識の中で、何故あんな馬鹿げたことを思い描いたのか、今でも不思議でならない。人間というものは、死に直面すると、意外冷静に自分を客観視できるものなのだろうか、いや、それとも、ひねくれてあまの天邪鬼じゃくな僕の人間性が既にあの頃から芽生えていたということかも知れない。

あの時以来、僕は決して海では泳がない。僕にとって海は、風景の一つとして眺める

だけのものとなった。夏ともなれば僕は、湿気を含んだ潮風と喧騒を避けて、ひたすら乾燥した空気と静謐せいひつを求め、信州の山々を彷徨ほうこうし続けている。



『ライ麦畑』で『卒業』して

高阪博一

サリンジャーが死んだ。こんな事を書くとは彼についての評論を書きそうだが、感想文すら書けそうもない。『ライ麦畑でつかまえて』しか、読んだ事がない人間に書けようはずもなく、書きうる才もない。

彼の名前を知ったのは、大学時代であった。

当時（昭和四十五年前後）は、大江健三郎に高橋和巳で、ど

ことなくおもしろい感じの小説が多かったような気がする。その同類と思つたのかもされないが、結局読まなかつた。社会人になつても、本棚に彼の文庫本はあるのだが、埃まみれになつていく一方であつた。

日記（会社業務の備忘録で、昭和五十九年から書いており、その末尾に読了した本の感想を数行書いていた）を見ると、平成十年に『ライ麦』を読んでゐる。何故、その時に読んだのか思い出せない。今から十二年前

だから五十歳、忙しい盛りの頃だ。日記には「瑞々しい感覚に感心。納得する部分もある」と簡単な感想が書いてあつた。

五、六年前だろうか、ある本屋で『キャッチャー・イン・ザ・ライ』という本を見つけた。「何や、ライ麦やないか」と思つて、訳者を見ると、村上春樹。サリンジャーというより、村上さんである。いつもの悪い虫が起きて、衝動買い、この癖は未だに直りそうもないのだが。そして、この本も、長い間、本棚で眠つてし

まつていた。彼の訃報がなければ、読んでみようという気にはならなかっただろう。

一章ペイスで二月の末頃に読了してしまつた。

しまつた、書けるはずもないのに。

一月の終りから読み始めた。

退学になつた主人公が帰省

特に印象に残つた部分は、童

以前、別訳で読んではいつたのだが、内容は全く思い出せず、初めて読むという感じであつた。読み進んでいくと、これが結構面白い。単に、訳者のせいだけだとはとは思えなかつた。欺瞞した大人の社会への批判や反発、将来に対する漠然とした不安、周りの人達に対する繋がりへの希求等々が感じられて、一日

するまでのほんの短い期間の物語であるが、一章毎にエピソードが違つている。丁度、主人公はドラマのようでもあり、主人公が君Ⅱ読者に語りかけるスタイルも面白いものであつた。こんなスタイルで三十枚程度の小説が書けぬものかと、ふと想像して

オドオドする描写を何かで読んだような、また見たような気がした。暫く考えていると、あの音楽が頭の中に鳴り響いてきた。その曲は『サウンド・オブ・サイレンス』つまり映画『卒業』の一場面であつた。
有閑マダムに誘惑されてホテルの一室で初めての経験をす



る、その時の主人公のオトオドした様子が浮かんできた。大学二年頃だったろうか。まだ、学園紛争の嵐が吹き荒れる前、友人同士が互い主義主張で悩まぬ前、数人と映画を見に行つたことを懐かしく思い出してゐた。

ホールデンとベンジャミン、オチコボレ(名門校退学生なので、そう呼べないかもしれない)と優等生という大きな違いがある。だが、年齢は十八歳前後と二十二歳前後で裕福な

家庭に育つた青年という共通項をもち、どちらも、何をしたいのか、どうすれば良いのかということについて、明確に決めかねているという悩みを持つている。

ホールデンは西部に行つて人知れず暮す夢を語るが、結局は家に帰り、分析医の診断を受ける。一方、ベンジャミンは有閑マダムの娘と恋仲になり、強奪して、バスで逃げる。これがそれぞれのお話の結末であるが、さて、今、彼らはどの様な老人になつてゐるのだろうか、ふと妙

な考えが浮かんできた。

ホールデンは作家になる(小説では作文は出来ているので)。世の中に対する皮肉を込めた強烈な批判で一躍時代の寵児となり、小説家としての地位を確立する。しかし、時を経るに従い、書けなくなつてくる。書けなくなつたことを自覚しつつ、忘れ去られてしまふ恐怖のため隠棲もできず、焼き直しのような文章を書き続ける。ふと、気付くともう七十七・八歳になつてゐる。(小説は一九五一年刊

行になっているので、そこからの概算)もう一度、死ぬまでに、これというものを書きたいと思うが、既に書ける年齢ではない。酒に溺れる日々が続く。玄関にあるロッキング・チェアでひとり酔いつぶれて、いつも見る夢、ライ麦畑で皆と歌い合っている夢を見ている。辺りは徐々に黄昏の夕日に包まれていつ果てるでもない眠りだけが続く。

をされている。娘と逃げたままでは良かったが、誘拐・暴行罪で訴えられ、長期の服役、その間に娘は別の伴侶を得て、暮らしている。服役中にそれを知り、服役後も、娘のことが忘れられず、引きずって生きている。もう一度、強奪しようと思ってみても、心の離れた彼女が、一緒に逃げてくれる筈もない。それが分かつていながら、忘れることができない。また、前科があると、まともな職業にもつけない。今、彼は六十五・六歳(映画は一

九六七年に製作されているので、そこからの概算)になっている。今日も一日の仕事が終わり、ただ寝るだけの宿屋に帰るため、老いの身体を引きずるように歩道を歩いている。傍らをバスが通り過ぎる。見ると、最後尾に若い男女の語らう後姿が目に入る。「あの時、何故、あのバスは走り続けなかったのだろうか」と呟く、皺の多くなつた頬に一筋の雫を流しながら。

なんとなくネガティブな想像になつてしまつたようだ。この

歳になると、どうもこんな想像をしがちだ。これでは余りに暗すぎる。もう少し明るいことが想像できぬものと溜息を吐いていると、別なことが頭に浮かんできた。

西部の広い畑。それはライ麦畑。その中を一本の道路が貫いている。一人の年老いた農夫が仲間を集めようとしている。キラキラと輝く明るい陽に照らされて、赤いスポーツ・カーが向こうの方から疾走してくる。農夫の前で車が停まる。初老の男女

が楽しそうに話をしているのが窓越しに見える。車の窓が開いて、運転していた男が道を聞く。ぶつきらぼうに農夫が答える。開いた窓から低い音で、音楽が聞こえてくる。農夫は聞いたことがあるのだが、その曲の題名が思い出せない。「あの曲は確か？」と思つた途端、窓が閉まり、車は去つていく。

何だか、「サリンジャーが死んだ」から妙な方向に行つてしまったようだ。最近、死亡記事を見ると、何かと考えてしま

う。『卒業』が近いせいなのか、それとも何も『つかまえて』いないせいなのか明確には分からない。単に感慨に浸っている時もある。このようにあらぬことを思っている時もある。

あちらに飛び、こちらに飛びと思いを馳せると支離滅裂になつてくる。しかし、この滅茶苦茶な想像の時間が至つて楽しいものだ。朽ちていく脳細胞を蘇らせることは不可能だとしても、その速度を緩めることは可能であろう。「さて、次はど

んな想像をしてみようか」独言
棚を眺めた。
ちながら、ふと、埃まみれの本

了

春つげる薄紅色の花びらに心癒され春を感じる

孫の手を引きて見上げる桜かなきれいきれいと歓声あげる

孫のもり慣れつこになり保母さんだ

滑り台いっしょにすべる心地よさ

かくれんぼこつちこつちと口をつく

水田竜子

精神病院闘病記 (2)

豊川 宣行

朝、六時三十分頃目が覚めた。顔を洗う。歯磨きをする。

ガラガラと、朝食を運ぶ台車が廊下を通って行く。

既に過半の人間が食堂の入り口付近の廊下に立って待っている。

食事を積んだ台車の中に、朝食が個人ごとの名札の付いた盆に乗っている。入院している者にとつての食事は、最大の楽しみであろうか。台車が止まると、先を争うように取っていく。

私もそれにつられて自分の名札を探し、盆を引き出す。

いつもの位置にないと、些かあわてて探す。台車は動かず、食事がなくなることはないのに、我ながら情けない。

盆をとると、味噌汁の鍋に並び、看護師に入れたもらつたお椀を受け取り、決まつた席に座る。

隣席の上坂老女が、毎度のこと「食事に毒が入っている」と騒いでいる。

看護師が毒が入っていないと懸命に話をすることがまったく聞かない。

落ち着き、あきらめ、忘れるまでこれは続く。

食事をとると、部屋に帰り朝の薬が来るのを待つ。

看護師が薬を持ってきて、患者が飲むのを確認すると帰って行く。

これで朝の恒例行事は一段落である。

私は喫煙室へ行つて、朝の一服を吸う。喫煙室は朝八時に鍵が開く。六畳ぐらの部屋に机があり、ライターが紐につながっている。

土屋さんが喫煙室に入ってきた。ゴールデンバットを吸っている。

この人はアルコール依存症で、病院を出入り入つたりしている。年金生活者である。いつものメンバーが集まつてくる。

※

太つたお腹を揺らしながら田中さんがドタドタと走ってくる。田中さんは女の患者のボスの存在である。

いつも小走りなのだがなぜだかよくわからない。

田口くんはk信用組合に勤めていたらしい。この病院へは十年位前から入つてきて

いる。

宝くじが当たつたらこの病院を訴えてやると言うのが口癖である。田中くんも身元引受人がいらないので退院の許可が下りない。よくなつても身元引受人がいないと、病院が終の棲家になる。

入院費をどうしているのかと不思議だったが、大抵、病院を住所にして生活保護を受けているとあとから知つた。

リハビリも何もしない退屈な一日が始まつている。

喫煙室が開くのと同時に病棟のドアの鍵が開き出入り自由になる。

私は気が向いたら散歩する。

永井さんはいつも散歩に出かけて行く。

この病院が開院した時から入院している。歳は七十歳ぐらいで背が高く百八十cm

ぐらいある。天涯孤独だ。

九時になると週に2回軽作業の日がある、箱の組み立てである。

強制ではないが、田口くんは毎回参加している、ジューズの缶が出るのである。

生活保護費から入院費を差し引いたお金が支給されると、すぐに使ってしまうので、いつも金欠状態である。

さて私の事を語ろう。

私の職場は市の外郭団体で、上役は市の役人の天下りである。

上司とそりが合わず、ストレスがたまっていたのであろう出勤途中、下痢が始まった。

最初は慌てて山道に駆け上がった。それが続く。

出勤するのがいやになった。無断欠勤して家族にも連絡もせず三日間行方不明に

なった。

自殺を考えながら山陰地方の温泉地を転々としていた。

死に切れず帰ってきたら大騒ぎになっていた。

妻子や肉親には心配をかけたと思う。精神科を受けた。

自律神経失調症と診断された。仕事をしても下痢が襲ってくる。

仕事上の事で段々ストレスがたまりアルコールでごまかすようになった。鬱症状が現れ、またアルコールに走り、という繰り返しである。

仕事は休みがちになり、医師から長期休養診断書をもらい、休んでみたりしたが、出勤すると、どうしても上司になじめない。

アルコールの量が増える。

ついに、妻が見るに見かねて私を入院させた。

そして今もこの病院へいる。

続く

追記

鬱病にかかる人は、真面目な人が多い。軽い鬱病の人は適当に仕事の手を抜いて、人にまかせられることは人にまかせることです。

また、毎日、東の空に向かって、朝日を浴びるのも効果があるそうです。



〔詩二編〕

大西隆史

散歩道

朝日に染まる散歩道

皆の寝起きを見に行けば

朝露をすするとんとう虫

じんわり目覚める木蓮に

朝から元気なスズメ見て

しつとり濡れた道をゆく

昼はさなかの散歩道

皆の活躍見に行けば

恋人求めるキチヨウ達

我が方来れと沈丁花

待ちわび騒ぐホトトギス

ぼかぼか小道を旅してく

夕闇迫る散歩道

ぼちぼち皆も店仕舞い

葉の裏お休みルリシジミ

夜に負けないスミレ色

白鷺の舞う空の境界

じんわり暮れる道をゆく

歩けや歩け

今日も行け

新たな友を新たな仲間を

求め求めて

今日も行け

平凡

時々怖いことを思う

もし明日目が覚めて

そこが音のない世界だったら

そこが光のない世界だったら

そこが臭いの無い世界だったら

私は空恐ろしくなった

時々さらに怖いことを思う

もし明日目が覚めて

そこが家族のいない世界だったら

そこが友人のいない世界だったら

そこが誰もいない世界だったら

私はただそうならないよう祈った

それでも明日はやってきて

私は音があつて光があつて香りがあつて

私は家族がいて友人がいてみんながいる

そんな世界に居ることに安心するのだ

ごくごく単純で当り前の

この世界に安心するのだ

ただ当り前の

このごく平凡な

そんな世界が

繰り返されることを

また私は恐ろしく感じるだろう

そうしたならまた私は祈るだろう

例会報告

いずれも場所は 兵庫県学校厚生会サンピア明石会議室 C

第14会例会

平成22年2月13日(土)午後3時

5名出席。詩(大西隆史)・競演(高阪博一・夏子)と、川柳(柴小路秀麿)の合評。

第15会例会

平成22年3月13日(土)午後3時

4名出席。あつい夏アラカルト(高阪博一)・俳句(彩華)の合評。

※6月の13(日)・14日(月)を第一候補として奈良旅行を予定。

(生一朗)



競演 第三回

ハル

第8回の例会で、「タイトル」を決めて作品をかいてみれば面白いのではないか、ということになりました。第一回のタイトルは『あつい夏』でした。第二回は「ほし」今回は「ハル」です。

※原稿処理の下手際で、競演が各号できちんと処理できず、ばらばらになりました。お詫びいたします。この6号で、とりあえずすべてを掲載して、区切りをつけることにしました。ご了承ください。

原稿を次号回しにしますと、作家・時系列別などで編集作業をしていませんので、編集者自身が混乱してしまいました。各号はその時点で送られてきたものをすべて掲載するという形をとりたいと思います。従つて無理をして詰め込んだり、間延びした誌面が出来たりとなります。本当に申し訳ありませんが、よろしくご理解とご協力をお願いいたします。(編集者)

貴方の命を救いたもう

王に尽くした無償の愛

神に捧げた命の髪

遙か昔の物語は今なお星座となりて夜空を彩りぬ



◆この部分がヨコ書きなのは作者の以下のメールによります。
(編集者)

※『神に捧げた王への愛』ですが、作品中にアラビア語を使用しております。PCの環境等によっては出ない場合もあるかと思いますが、もし可能であればこの作品のみ横書きで出していただければと思います。・・・中略・・・アラビア語の使用に関しては、神話とはいえなるべく現実に近いものがあつたのがあります。言葉は原文と日本語では同じ意味でも形が違ふと受ける印象が違ふと私は思っていますので、言葉の部分にのみアラビア語を使用しました。

あと、競作の題が「ハル」なのに今回の作品の何処にその要素があるか気になると思うのですが、作品の元となつた『髪座』が春の星座であることから今回の競作に使わせていただきました。

神に捧げた王への愛

～星座“ベレニケの髪の毛”の神話より～

令月

陽は沈み 空が月(つき)月 白(しろ)白に染まる時
空を見上げて無事を祈る
たった一人の貴方が無事であるように
たった一つの国が減びぬように

الرجاء مساعدة ملكنا وقواتنا ما إذا كانت مصر

(どうか王と我がエジプト軍をお助けください)

愛する人を守るため
多くの民を救うため
武器を手に取り戦場へ
王は兵を従えて遠き国へと旅たてり

戦場を駆けぬく貴方を思いつつ
側で守れぬ無力な己に涙する

戦場で貴方が刃を振るうなら
私も刃を振るいましょう
貴方が愛したこの髪を
神へと捧げ貴方の無事を願いましょう

انتصار الملك النصر العسكري في مصر

(エジプト軍の勝利 王様の凱旋だ)

神に捧げた髪の毛は
遠く夜空の星となり

春、そして巡る春

高阪博一

抗う紅葉は冷たい風に吹かれている。逆光に彩を添えて舞い落ちる。紅に染めていた僅かな時間を懐かしむように、再び巡りくる時を求めるように。道に重なり合い、飛び散る毎に、季節は確実に移り変わっていく。

いつの頃からか、私は散歩するようになった。家の近くに、小さな川が流れ、堤が整備された遊歩道があり、それに隣接して、大きな常緑樹の植えてある遺跡があつた。遊歩道から遺跡そしてまた遊歩道が、いつものコースになつていた。その道には、四季の花々が植えられており、季節の移ろいを見せてくれている。

その為だろうか、歩く人は多い。年齢層は高く、若い人は少ない。グループで楽しそうに喋りながら歩く人、一人で黙々と歩く人、夫婦で静かに微笑み交わしながら歩く人。それぞれが四季を背景に歩いている。そう、あの夫婦と出逢つたのも、その道、半年ほど前、桜の花が満開の頃だつた。

古木と若木を合わせて三十本程度、その道の南端に沿って植えてある。古木は黒い表皮がこぶのように幹を覆い枝分かれも多く、道を上から見下ろすように小川まで張り出していて、並みとは違う貫禄に満ちている。一方、若木はまだ細いのだが、上に伸びようとする鋭い意志が感じられる。そして、こ

の木々が見事な薄紅の花を毎年咲かせていた。

その桜の辺りは、道がやや狭くなつており、古木の根が道に露出して、天井のような頭上の桜に気を取られていると、引つ掛けて転びそうな所もあった。花の盛りの頃は、その下で、宴が朝から夕方まで行われて、花を見るどころではない。喧騒を避けるために、どうしても日が暮れてから、そこに行くようにしていた。街灯の光だけが、それはそれで、風情のあるものであった。

その日も薄暗くなつて、出かけたのだが、どうした加減か、木の根に蹴躓き転んでしまった。したたかに膝をうち、手のひらのあたりに、僅かだが滲むものがあつた。丁度、私の後ろを歩いていた初老の男女が助けおこし、空いているベンチに坐らせてくれた。

「大丈夫ですか」と男性が声をかけてくれたので、「大丈夫です。綺麗だから、見とれてしまつて」と何となく、ばつが悪そうに、私は答えた。「これをどうぞ」と今度は女性のほうから声が出て、「ありがとうございます」とお礼をのべつつ、受取り、手の傷にはりつけた。「桜は近くで見るといいですが、離れて見るのもまたいいですよ」と男性が五十メートルほど先のベンチを指差した。「あそこから見ると、それぞれの桜がほんのり色づいた綿菓子のように、それでいて、一本の淡い並木道になつていて、感じがします」と女性が続けた。「そうですね。明日にでも、ゆつくり見てみます」と顔を向けると、「気をつけて」という言葉とともにその男女は、薄闇の中に消えていった。

若々しい緑の葉がキラキラと陽に輝き、梔子の花が一寸厚めの、どことなく油をひいたような花をつける季節になつた。あの男女とはよくその道で出会うようになっていた。多分、それまでもよく会つてい

たと思うのだが、意識はしていなかったのだろう。あの件以来、挨拶を交わし、時には世間話をするようになって、その男女が夫婦である事、男性は最近定年退職して、仕事はしていない事、子供がいない事などが分かった。

蝉の鳴く声が聞こえるようになった。日一日と大きくなり、騒々しいという頃になった。この頃は午前中に歩く事になっているのだが、陽が射してくると汗ばんでくる。あの桜の葉陰のベンチで休んでいると、ニコニコと笑いながら向こうから歩いてきたあの夫婦が傍らに坐った。「このベンチでしたね」と男性が声をかけてきた。「その節は」と私は軽く答えて、なにやかやと世間話を始めた。

「何かする事が見つかりましたか？ いざとなると、なかなか見つからないものですが」と私が問うと、「仕事ばかりの生活で、趣味らしいものがなかったのですが、最近、和歌をやるようになってきました」と多少照れたように男性が答えた。「へー、和歌ですか」と言うと、「老人向けの同好会のようなものが、結構あるでしょ。それなら二人で出来るんじゃないかと：」男性が緑の葉を見上げながら答えた。

「運動はまったくダメ。歌やダンスもダメ。それなら、いつそ文科系と思つて」と横から女性の声が出た。「この道にはいろいろな花や木があるでしょう。二人で歩いているとその印象や感想を、和歌のように五・七・五・七・七で言い合っていたんですよ。時には私が最初の五・七・五を言い、この人が七・七と続ける。また逆の場合もありますかね。全く基礎知識はないんですが、それなりに出来るものですね」と男性が続けた。「そのためですね、いつもお二人で笑い合っておられたのは」と私が不躰に言うと、「そうなんです。ほんと、下手なんですよ」と女性が明るく微笑んだ。

彼岸花が毒々しいまでの赤ら顔を突然覗かせ、金木犀が小さな橙色の花をつけて何となく甘い香りを辺りに振り撒き、清々しい風が茜色の夕暮れを運んでくる季節になった。薄紅葉はもう過ぎて、紅に染まつた小さく艶やかな葉は落ちてしまおうとしている。あの日以来、その夫婦と会わなくなつた。ぶつりと会わなくなつた。

紅葉が落ちてしまうと当分は花を見ることが出来ない。常緑樹はあるものの、葉のない木々があると、その緑がくすんだように見える。枯れ枝を通り過ぎていく風は音がビューという濁音で、寒さと淋しさを誘う。歩いていても、ペイスが早くなる。多分、春を待つ心の表れかもしれない。梅が咲くまでも暫くの辛抱だ。

小川の水が光を鮮やかに反射し、波の小さな飛沫がどことなくゆつくりと飛び交う季節になつてきた。いつも歩く遺跡の一角には梅が十数本植えてある。紅梅が主で、多少薄い紅梅があり、中に一本だけ白梅がある。その横にあるベンチに坐っていると、優しい香りに包まれる。梅の香りは清潔で己を主張しないものだ。その点、菊と似通っているような気がする。しかし、菊はこれから消滅するものへの挽歌のようで、凜としているがどことなく翳りがある。梅はこれから成長しようとするものへの序奏のようで、そこはかとなく歓びに満ちているような気がする。

そんな事を考えながら「これが梅の香り。いつもながら、品あるよなあ」と深く息を吸い込んでいると、後ろ方から声がした。「お久しぶりですね」聞き覚えのある声に振り向くと、あの女性だつた、二人

ではなく、たつた一人で。

「長い間、お見受けしなかつたので、どうされているかと思つていました。もう、半年以上でしようかと訝りながら、「ところで、ご主人は？」と問うと、哀しげな目を向けて、「亡くなりました」と奥さんは小さな声で答えた。「え！どうして」と突然のことに驚いて私が続けると、「蟬の声も静かになる頃、朝起きると、私の横で息を引き取っていました。心臓に持病がありましたので」と淋しげだが、どこか乾いた声で呟いた。「あつけないものですね。分かつてはいても、一人になるなんて考えもしなかつたことですもの。それから、何も出来なくて、家にじーとしてることが多くなりました。気晴らしに歩こうと思つたのですが、歩いていると、ここであんな話をした、あそこでこんな話をしたと思ひ出され……」と白い梅をぼんやり眺めながら言葉をつないだ。「そうですか」と言うのがやつとだつた。部外者の私が何を言つたとしても、この人の心に届こう筈はない。白々しい慰めの言葉など必要はない。ただ、黙つて聞くしかない。

「正月が過ぎ、梅の季節になつて、やつと、あの人の物を整理する気持ちになりました。

ぼちぼちしていると、あの人の机から、こんなメモ書きが見つかりました」と一枚の便箋をひろげた。「拝見します」と手に取ると、黒いインクで一字一字きつちりと書かれた五・七・五の文字が目に入つた。『散りにけり、薄紅はなの、散りにけり』とそれには書かれてあつた。「和歌の上の句ですな」と言うのと、「そうですね」と奥さんが躊躇いがちに答えた。

「あとの七・七をどう作ろうかと思案しています。『ウスベニハナ』はなんだろうかと思つていたのです

が、どうも梅ではないようです。梅は人知れずとことなく隠れたように散る感じですね。やはり、桜です。ね」と確かめるように奥さんが呟き、「桃というのも考えました。だけど、桃はぼつたりとしていて、桜のすつぱりとした散り際の意地のようなものがないですものね」と同意を求めるように言葉を続けた。「私も桜だと思えますよ」と言うと、「そうですね、きつとそうですね。有難うございました。また、」の声を残して去っていった。

ゆき柳が白い花を咲かせた。小さな花が群れていて、白いヴェールを道の端にかけたようになり、続いて木蓮が縦長の大きな白い花を咲かす。咲くまでに鳥に啄ばまれ、無残なものもあるが、それは鳥が食べる分を見込んで咲くためで、自然とはそんな摂理で動いているものなのだろう。

吹く風が暖かい空気を運び、桜の蕾が薄紅色になる。咲く時を今か今かと待っていると、さーと吹く風が合図でもあるかのように咲き始め、あつという間に満開を迎え、また吹く風に花びらを散らす。今年には散る桜を見ようと思つた。満開の時期は人が多すぎる。宴はまあ良いのだが、あの肉の焼ける臭いは桜に失礼だ。どう考えても合わない。生々しくて、陶然とした気分が断ち切られてしまう。

満開を過ぎて、散り始め、その真つ盛りのまだ陽の残る夕暮れに出かけた、あのベンチに座ろうとして。思つていた通り桜が散つて、道は薄紅色の布を敷いたようになっている。

思つたとおり人は疎らだ。見るとあのベンチに一人の女性が坐っている。近づきながら、「奥さんでしたか、久しぶりです」と声をかけて、傍らに坐つた。

「数日前から、待っていました」と奥さんが一寸弾んだ声を出した。「どうして、また」と問うと、「や

つと、出来たんです、あの後の七・七が」と声が返ってきた。「これ、見てくださいますか」と梅の頃に見た便箋を弾むように、ぱつと開いた。ご主人の書いた黒いインクの文字の一行下に、ロイヤル・ブルーの鮮やかな文字が美しく踊っている。『ささらぎ流れ、花筏（イカダ）となりぬ』と読めた。

「あの梅の頃にお別れしてから、何度かここに来て、花のない桜を見ていました。丁度、この道が桜のトンネルのようになっていて、小川に枝も張り出しているのがよく分かりました。何度もここを通っていたのに、その頃は気付かなかったのです」とどこか詫びるように奥さんが言葉をつないだ。「そうですね。まるでトンネルですね。今は薄紅ロードと言うのでしょうか。その下の小川にも、散った花が一杯になって、小さな音を立てながら、静かに流れていますね」と私も初めて気付いたように相槌を打った。

「あれから、あの人の残した本や図書館に行つて、いろいろ調べてみました。なかなか、これだという言葉が見つからなかつたのですが、やつと、見つけて作ってみました。主人はどう言うのでしょうか、笑うでしょうか」と呟きながら、小さな川面いっぱいになっている花の筏を眺めていた。どう答えるべきか躊躇ったが、「きつと、ご主人は『上手く、続けてくれたね。花の筏になつて、お前を見ているよ』つて言つてらっしゃいますよ」と奥さんの横顔を見ながら静かに続けた。「子供がいない私たちです。形見に置いていつてくれたのかもしれない。二人で作つた形あるものとして。また、来年も、この便箋を持つて、ここに、来るんでしょね」と言う奥さんの横顔に幽かだが、微笑が蘇っているような気がした。「読んでくださつて、ありがとうございます」と言いながら、奥さんは立ち上がった。西陽が奥さんの輪郭だけを照らした。暗くなつた顔のあたりにきらりと光る雫を見たような気がした。

暗闇が迫ってきたベンチに私は残った。外灯の光にぼんやり照らされて、花びらは細雪のように舞い散り、さらさら小さな音をたてて流れる小川に落ちていった。この小川はきつと命の海へ続いているに違いない。ご主人が亡くなつたのは動かしがたい事実だが、奥さんの心に生き続けることは紛れもない真実なのだろう。あの書かれた紙がその証なのだ。奥さんは命あるかぎり、巡る春ごとにここに佇んで、あの筏を見て、小川の音を聞くことだろう、まるで、ご主人の姿と声のように。『散りにけり、薄紅はなの、散りにけり、ささらぎ流れ、花筏（イカダ）となりぬ』をもう一度、薄闇の中で繰り返した。

了



〔短歌〕

春

大西隆史

帰省して 父の背中の 小さきに そつと寄りそう 二十二の春

腰痛の 父貼る湿布 笑ったが 齡二十二 自らも貼る

お手玉

はなの はなこ

ハルさんは、ひとり暮らしのお年寄りです。

次の土曜日はふれあい学級で、近くの小学生とお手玉を作って遊ぶことになっています。

ハルさんは、押入れから布切れが入ったかごを出してきました。かごの中は花畑のようです。

(さて、どの布を組み合わせようかしら)

あれこれ考えて、お手玉を作る布を用意しました。

土曜日の朝、いつもより早く目が覚めたハルさんは、おしやれをして学校へ行きました。

子どもたちは裁縫箱を机において待っていました。ハルさんの布をみて

「まあ、きれい」

「着物みたい」

「これでお手玉ができるのかしら」と口々に言いました。

ハルさんはお手玉の作り方を説明しました。

「こういうふうには布を合わせて……」

子どもたちは真剣な目でハルさんの手もとをみつめます。

「あれ、へんな形になっちゃった。おばあちゃんこれでいいの」

「あらあら、どこが間違ったのかしら」

「糸がもつれちゃった」

ハルさんはひつぱりだこです。

最後に小豆を入れて口を閉じます。これはむずかしいので、ハルさんが縫いました。

ハルさんは、

「おひとつ、おさら。おふたつ、おさら…」と歌いながらお手玉をしてみせました。

「おばあちゃん上手」

いつせいに拍手が起りました。

「おばあちゃん教えて」

「わたしも」



同人募集

アクトス -文藝集団-

新しい文芸グループ「アクトス」をたちあげました。携帯・パソコンからのインターネット参加を歓迎します。楽しく『和』を大切にします。

活動内容

- 1 特定のジャンルではなく文筆全般にわたります。
①創作 ②合評(例会) ③同人誌(アクトス)の年4回発行
- 2 参加資格はありません。「書きたいという気持ち」だけで結構です。
- 3 義務は ①会費、月額1000円 入会金なし[学生は月額500円]
(会費には同人誌代・郵送費等の事務費含む)

※1年前前納。(前期・後期の2回分納可)

(途中入会は半年単位で考えます。納められた会費は返金しません。)

▶活動の具体は、以下の通りです。

- ①作品の提出(3月、6月、9月、12月末) - 5、8、11、2月の4回、同人誌(アクトス)発行。 無料で2部受け取る。
(余分に必要時、作品提出時に申し込む、頒価1部500円。)
- ②各月第二土曜日 学校厚生会明石サンピア 午後3時～
(例会出席は自由です。出席したときは、会場代・茶菓代などとして1000円必要)
- ③概ね年に一度、アクトス文学賞を選考・表彰

※携帯あるいはネットだけでの参加も可能です。 ※ペンネーム推奨。

作品の提出は、携帯メール(詩・短歌・俳句など)、パソコンメール(エッセイ・小説・紀行など)で行います。扱えない方は、相談させて頂いて郵送も可能とします。

例会後は懇親会、また旅行などもおこなっています。

運営は当分の間、例会などで相談・連絡の上、会長が決定しておこないます。

平成21年1月1日 アクトス会長 大西生一朗 いいちろう

連絡先: 〒673 - 0031

兵庫県明石市宮の上1の17の614 大西方 アクトス編集室

Tel&Fax 078-922-4562

メール: actos2008@mbe.nifty.com

◆HP <http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

[2009/11/7改訂]

◆例会は第2土曜日です。15時から サンピア明石

以後も第二土曜日、15時からの予定です。出欠のご連絡は不要です。

※参加希望の方は奥付編集室までご連絡下さい。詳細をご案内します。

※アクトスのHPは、<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

※アクトスは「行動する人」の意。

編集室から

◆マンシヨンの書斎の窓からは国道二号線が見えます。三十メートルは離れているのですが、音は上にあがる性質があるらしく、車の響きが聞こえてきます。

殆ど四六時中、真夜中も明け方も車が走ります。

南のリビングや和室にいると全く何も聞こえません。

この騒音の聞こえる北の書斎に来て、もうすつかり慣れて別に気にもなりません。

それどころか、いろいろな音を聞いてい

◆パソコン用HPに掲示板を作成しました。ご利用ください。

ると「生きてるな」とさえ思います。

社会も他人も自分もです。

家庭を支え働くドライバーに思いをさせながら、「はて、僕はこれからどない生きるんやろ」と考えます。

◆私事ですが、この四月から、日常が忙しくなりました。といつて退職後もいろいろとやっていましたので、時間の密度が濃くなつたという感じですが。

小説を書きたいのですが、なかなかスタートできません。

そうこうしている間に、アクトスには次々に素晴らしい作品が寄せられます。

男性陣ががんばっていますが、特に高阪さんは『凄い』と驚いています。

嬉しくなり、感心し、そして些か慌てます。

「僕は書けてないなあ…」

書斎はため息がそこら中に転がっています。

まあ、ええか、では、すぐに歳を重ねて行きそうです。

「がんばろうか」

と思いつつ雑用に手を取られて、それをいいわけにしつつ過ごしています。

【生一朗】

次号(第7号)は

原稿締め切りは6月末。

どんな原稿が書いて書けて、と言う方と、なかなか一編が完成しないと言う方と様々なようです。

物事は何でもそうですが、続けていると斜めに伸びていきます。但し、踊り場があつて、そこではいつこうに前に進みません。しかしそこを我慢していれば、また次に行きます。

伸び方の角度や長さ、踊り場にいる時間、総て個人で差があるようです。

◆競演第4回

今回は「うみ」とテーマを決めました。『湖・海・生み・蒼海・宇美・熱み』など、作品をお送りください。

◆入会するには◆

- ①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
 - ②〒・住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業
- を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可
- 〒673 - 0031 明石市宮の上1の17の614
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900 - 5 - 39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

◆合評会 毎月第二土曜日

※午後 3時～5時

◆場所 サンピア明石

〒673-0882

明石市相生町2丁目9番20号

TEL (078)911-2250(代表)

FAX (078)913-1140

JR・山電明石駅から南東へ徒歩約10分

市バス「保健センター前」下車すぐ

立体駐車場有(有料)

アクトス 第6号

平成二十二年五月一日

編集 大西生一朗

いichろう

発行

673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社 「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)500円
